

内山幸久著：
『果樹生産地域の構成』

大明堂，1996年3月発行，229ページ，3500円。

本書は著者の長年にわたる果樹生産地域に関する論攷をまとめたものである。その目的は第1に果樹生産地域の機能的構成とその構成パターンを明らかにし，第2に各地の果樹生産の特質を究明することにある。

本書の構成を示せば，

I 序論

II 果樹生産地域における地域的機能単位の構成

III 果樹生産の地域的展開

IV 結論

ようになる。このように，著者は先の2つの研究課題を解明するため，それぞれ2章・3章をあてて分析を進めている。そこで，ここでは2・3章の内容を主に紹介していきたい。なお，2章は著者の学位論文を骨子とし，本書の核心部分に相当する。

第1章では果樹生産地域に関する先行研究の検討が行われ，本書の位置づけがなされた。

第2章では地域的機能組織¹⁾の考え方から果樹生産地域の構成が究明された。まず，長野盆地のリンゴ生産地域と甲府盆地のモモ・ブドウ生産地域を対象に，生産から流通までの各段階でみられる地域的機能単位とその機能のおよぶ範囲（機能地域）が空間的に確定され，それらの性格が分析された。その結果，地域的機能単位として，第1次の果樹生産農家，準第2次の共同組織（共同防除，共同灌漑），第2次の共同出荷組合，第3次の農業協同組合，第4次の連合組織会までの4階層が検出された。これは地域を考察する際，第4次オーダーのみ取り上げれば，それぞれの果樹生産地域が1つの等質地域として把握されることを意味する。他方，第1次から第3次までのオーダーがその中に含まれることを考慮すると，それぞれは機能地域として捉えられるものである。

著者は果樹生産地域の地域的構成パターンをこれら4つの各機能単位を要素とした2つのモデルに事例研究から帰納している。それらは第2次オーダーの共同出荷組合の組織力の強弱から類型化されたものである。著者はこれらを従来の研究と対照し，他の果樹生産地域を研究する指針になりうると位置づけている。この果樹生産地域の機能的構成のモデル化が本書の独創的な点である。

第3章では1960年代以降の果樹生産の全国的動向が面積・収穫量と果樹園密度から明らかにされた後，長野盆地の小布施町・中野市，広島県因島，香川県東部の各地域の果樹生産の地域的特質が著者の綿密なフィールドワークから明らかにされている。そのなかで，各地域に共通する特質として，果樹生産の多様化とそれを誘導した組織の役割が注目される。とりわけ，後者の組織の問題は果樹生産地域を含め，農業地域を考察する際，より重要視される視点といえよう。以上の分析を経て，

第4章で本書の内容は要約されている。

本書は著者の実態調査に基づいたものであり、農業地理学のフィールドワークを学ぶのに好適である。一筆毎の土地利用から何を地理学者は読み解き、問題としているのか。そして、地理学の対象としての地域をどのように考えているのか。このようなことに関心のある方のほか、当然のことながら1961年の農業基本法以降、選択的拡大政策で翻弄された果樹生産地域の動向に関心のある方

に読んでいただきたい本である。

1) 地域的機能組織を用いた研究例として、以下のものがある。

斎藤 功 (1989) : 『東京集乳圏—その拡大・空間構造・諸相—』古今書院

田林 明 (1990) : 『農業水利の空間構造』大明堂

(伊藤貴啓)